

南アの現状 日本の子らへ

休学し現地で教員 岡村さんネット授業

黒人差別の名残なお

都内の大学を休学し、南アフリカで小学生に学習指導をしている学生がいる。ネット検索で現地の学校の教員募集を見つけ、渡航してしまう行動力の持ち主。かつての差別政策の名残が見られる現地の子どもを支えようと、日本の学校とオンライン交流授業を始めた。



南アフリカで子どもたちに教える岡村さん(中央) 〓本人提供

武蔵野大教育学部の岡村奈々さん(21)。小学生の頃、行事でルワンダ難民の話聞く機会があり、アフリカに興味を持つてきた。大学に入り、海外経験を積みたいと考えて「アフリカインターン」と検索したところ、南アの学校に教員を派遣している会社を発見



インターン見つけ応募 渡航

見。履歴書の審査やオンライン面接を経て、今の学校への派遣が決まった。岡村さんのインターン先は同国有数の大都市ケープタウンにあり、隣国ジンバエからの黒人移民の子どもが多く通っているという。都会らしくおしゃれな制服があり、渡航前に想像していた自然あふれるアフリカの姿とは違った。担当する9、10歳の児童と関わって驚いた。写真を撮ろうとすると、子どもたちは「黒人は汚い」と思われたくない」と身だしなみを確かめる。岡村さんが風邪を引くと、「私たちが黒人がうつしちゃった?」と心配する子もいたという。

悪名高いアパルトヘイト(人種隔離)政策は1991年に撤廃されたが、白人と黒人の経済的格差は今も大きいと岡村さんの目には映る。白人が使う食品店や飲食店は高価で、入る黒人は少ないという。岡村さんは「そんな様子を見て育ってきた子どもたちは、黒人として生まれたことをマイナスに思いながら暮らしている」と話す。岡村さんは、現状を多くの日本人に伝えることが支援につながると思った。国際教育に関わる日本人教師によるSNSグループで、オンラインによる交流授業を提案。多くの学校から打診があり、10以上の学校と交流授業を行った。11月22日にあった白百合学園小学校(千代田区)の6年生約120人との交流事業では、あいにく南ア国内の交通機関のストライキで学校が臨時休校になってしまったが、岡村さんが力を込めて現地の状況話した。白百合学園小の児童からは「黒人として生まれてだめなことは少しもないと伝えたい」「差別のことをもっと知ってほしい」という感想が聞かれた。岡村さんは自分のように「子どもの頃に聞いた話が頭の片隅に残って、『アフリカのことを知りたい』と思う人が増えるとうれしい」と話す。来年度には帰国して復学予定だ。

白百合学園小の児童らと交流する岡村奈々さん(スクリーン内) 〓11月22日、千代田区九段北2丁目

(狩野浩平)